

幼稚園の先生になって…

渡辺 知子

私の園ではPTA活動の一つに『文集』作りがある。年度末に発行され、幼児が絵が描き、その横に保護者がコメントを書き、教師もページの分担で短文を載せるという内容がここ数年続いている。

先日「文集に載せるため、アンケートをお願いしませう。」と六つの質問が書かれた紙をもらった。その中に『先生になって良かったと思う時』というのがあった。私は「うーん」とうなってしまった。一言で言い表すことが出来るだろうか。毎日の生活の中で先生になってとまではいなくても、この仕事をしているから出会う出来事で、よかった嬉しいなと思うことは沢山ある。

街角で出会った四歳児クラス六月のAちゃん。どうして先生ここにいるの？と不思議そうな顔で見つめていた。翌日園に来て、自分からは話しかけることの少ないAちゃんが「先生と会ったよね」と小さい声で話しかけてくる。「ねえ、会ったね。先生びっくりしちゃった」と二人でにっこり笑いあう。その出来事が二人にとっての宝物となる。そんな時は嬉しい一時だ。私が先

生だから味わえることではないかと思う。

嬉しくない時もある。Dちゃんとの出来事。大型積み木一段目に乗りTVヒーローごっこをしていた五歳児クラス五月のDちゃん。「やられた」とオーバーなしぐさで床の上に倒れる。少し離れた所にいた私は、遊んでいるなどその動きを目のすみに捉える。しかしDちゃんは倒れたまま動かない。「あれ、どこか打ったのかしら」と近づくとDちゃんはピクリとも動かない。「Dちゃん」と呼ぶ。目を閉じ動かない。どこを打ったの、なぜ動かないの、なぜ泣かないの、応援頼まなくちゃ、いろいろな思いが浮かぶ。他の先生の動き、他の幼児の今の動き、Dちゃんの家との連絡のしかた…。その間ほんの数秒だったと思う。Dちゃんは片目を開け「しんだまねしてたんだ」とニヤッと笑う。全身の力が抜けべたりと座り込んだ私。Dちゃんを抱きしめ「ああ、ああ」としか言えなかった。Dちゃんは笑い顔を引っ込める。「先生びっくりしちゃってね。本当にびっくりしちゃったんだよ…。Dちゃん動かなくなっちゃったで

しょう…」泣きたいくらい切ない気持ちで繰り返してしまった。あの日からもう十年以上も経ったけどあの時の心のふるえは今も身体が覚えている。

四歳児クラス十一月のKちゃん。ままごとの棚、中型積み木、空き箱、いろいろな物を遊びに取り入れ片付けの時にいなくなってしまう。使う物が多いから片付けるのも大変。沢山の物を動かすからエネルギーも無くなってしまうのかもしれない。いろいろある物の中で中型積み木の片付けは特に難しい。というのは中型積み木は壁面の前が所定の位置で、壁面に飾られてある。たべもの列車”に積まれた果物を取る時、乗ったり降りたりするのでビニールテープで区切られた中にきまりよく片付けなければならぬからである。

その日、片付けの言葉を言う前に「Kちゃんどうしよう。乗っても大丈夫なように片付けたいんだけど…」と声をかける。Kちゃんは積み木の片付けに加わる。半分以上くらい積まれたときKちゃんは「積み木はセンをそろえればいいんだ」とつぶやきながら直している。私は「せ

ん？」と聞き返す。Kちゃんは「そうだよ。せんだよ」と答え、「ここがだめなんだな」と積み木を動かす。すごい、Kちゃんは毎日毎日の遊びのなかでこんなことに気付いていたんだ。「Kちゃんすごいことに気付いたね。ここまの線の線を描けると乗っても大丈夫になるんだね」「ねえ、ここまの線を描、ほらこんなふうに乗ると乗っても大丈夫になるんだって」と私は嬉しくなって、K男に声をかけたり、周りの子達に知らせたりした。

毎日の生活の中で、誰かの発見やつぶやきがクラスのものになっていく瞬間というのが時々ある。何かの遊びがいつの間にかクラス全体に広まることがある。遊びにおいては一斉に教師がさせるのと、いつの間にかクラス全体が一斉のようになっていくのでは、一人一人の幼児の意識には大きな違いがあるように思えてならない。Kちゃんのつぶやきはその後積み木を片付ける時「せんは揃ったかな」とクラスの中で生きつづけている。このようなつぶやきをきちんと捉えることは、毎日の生活の

中で、私にとってには難しい。しかしこんなつぶやきをしっかりと受け止められた時もよかったと思う時である。

C子との生活においても良かったと思う時があった。

C子は自分の思いを強く出すが、友達とうまくかかわっていくまでに時間のかかった幼児である。C子は園内研究で研究対象児として記録した幼児であり二年間の過程がわりと整理されて残っている。C子の二年間の変容は次のようになる。

△四歳児四月～六月▽

○ 周りの人は、自分の思いや欲求は受け入れてくれる
と思ひ、相手場所をかまわずに、動きや言葉で表現する時期

C子は入園前は家の中で過ごすことが多く近くの公園で遊んだり、同年齢の子と遊んだりすることがあまり無かったということである。初めはこわごわ乗っていたブランコもその面白さが分かると「かわってやらないからねえ」と言いながらずっと乗っていたり、友達が集まり

のため保育室に入った頃空いたブランコに乗ってなかなか降りようとしなかったりしていた。担任が「またあとでね」「今度また乗ろうね」と言っても聞き入れようとしめない。

C子は入園当初から自分の思いを強く出すが受け入れられないことも多くそのため泣いたりすることもあった。そこで担任はC子の欲求を受け止め満足できるようにした。時には我慢させたりきまりを守る大切さをしらせたりした。

C子は興味があることには自分から進んでかわり、そばにいる人に思いを話したり尋ねたりする姿があり、園の中の物や場の名称、生活の言葉を獲得していきながら次第に友達や友達がしている遊びに関心をもっていた。しかし遊びに黙って加わったり、「入れて」とは言っても返事を聞かずに遊びを始めたりすることで友達に指摘されることも多くあった。

△四歳児六月～十月▽

○ 一緒に遊びたい友達に自分の欲求を言ったり担任に言ったりする時期

九月のある日、同じクラスの友達が古毛糸を使い焼きそば屋を始めた。C子は店に近づき、黙って焼きそばをすばやくつかみとる。焼きそば屋をしていた友達に注意され焼きそばを返すように言われると、怒ったC子はそばにあったブロックを投げようとする。担任は友達と遊びたいのに遊び方が分からず、自分の思いついたやり方は拒否されどうしたら良いか分からないためパニックを起こしているC子の思いを他の幼児に知らせ、C子に対しては財布やお金を作り「くださいな」と一緒になって客になり遊び方を知らせたりした。この時期担任は一緒に遊びながら遊びに必要な言葉を知らせたり友達とかかわって遊ぶ楽しさを味わわせるようにした。C子は一緒に遊びたい友達に一方的ではあるが自分の欲求を言葉や動きで出すようになり、友達と一緒に過ごす楽しさを味わうなかで友達は自分の思いどおりには動いてくれないことに気付いていった。

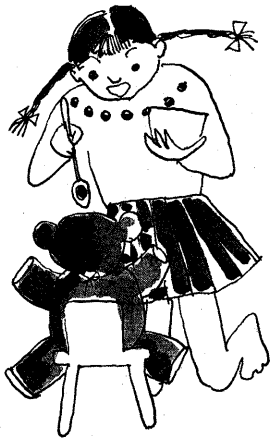
△四歳十月～五歳四月▽

○ 自分の考えや思いを言葉で表現しながら遊ぼうとするが、相手の反応を気づかうよりも自分の思いで動くことが多い時期

友達と遊ぶ楽しさが分かってきたC子は、友達と同じ場で遊ぶようになってくる。四人の女児とおうちごっこを始めた時、B子と二人でどちらがお母さんになるかで譲らず、話し合ってジャンケンになる。しかしジャンケンに負けると、「どうしても我慢できないよう」と泣き、他の幼児が嫌になって辞めようとする。「やめないで」と頼み、やっと遊びが始まることもあった。C子は入園当初から言葉で表現することができたが、言い放しだったり、自分の思いが強い時は相手の思いを感じることにできにくい時もあった。

三月、遊戯室でおうちごっこをする女児二名と一緒に遊ぶが、保育室から電話を掛けたり（相手は見えない・声も聞こえない）、保育室で一人で紙を使って御馳走を作り届けるというかわり方をしている。御馳走を作っ

ている時同じ組の女児が「なにしてんの？」と話しかけるが返事をせず黙々と御馳走作りをし、そばにいた教師に「Dちゃんが聞いているよ」と教えられて返事をする



姿がある。

△五歳児四月～九月▽

○ 相手の思いや考えを感じられるようになるが、自分の思いが強くと、動きや言葉で思い通りに進めようとする時期

六月、前日F子と大型積み木を保育室に運び、『二階建ての家』を作って遊び「つつぎ」のしるしをつけて降園する。翌日登園後ハムスターとしばらくかかわり、その後、別の遊びを始めていたF子に近づき「昨日遊んでいたから今日も遊ぼう」と言う。F子は嫌がる。C子は一人で遊びを始めるが、度々F子を誘いにいき、自分の思いどおりに参加してくれないことが分かるとぶつとということもあった。担任は公正な立場に立ち、双方の思いを代弁したり、気付かせたり、一緒に考えたりしていくことでC子も、C子を取り巻く他の幼児の育ちも図っていくように心がけた。また、気持ちが悪く落ち着いた時の姿を他の幼児に印象付けていくようにした。

△五歳九月～一月▽

○ 思いどおりにならない時は動きでなく、言葉で伝えるのが良いことを感じ、話すようになる時期

C子は友達とルールを守って遊ぶ面白さを感じるようになり、ルールを守るなかで自分なりの表現をして楽しめるようになったことで満足感を味わい、言葉で伝えるのが良いことを感じて動きではなく言葉で表現しようとする姿が見られるようになる。担任は、ルールを守って遊ぶ姿を他の幼児に印象付けていくようにした。

△五歳一月～三月▽

○ して欲しいことを頼む時は、相手の思いや状況を考へて受け入れられるように話す時期

二月、同じマンションから通う隣のクラスのB子と「ドッジボールしよう」と約束して登園して来る。C子は同じクラスの男児二名を誘い一緒にコートでB子を待つがB子は来ない。C子は一人でB子を探し見つけると

「B子ちゃんドッジボールしよう。さっきやるっていったでしょ」と言う。B子は小声で「さっきやるって言ったけど、もうしないの…」と困ったように言う。C子は「つまんないよつまんないよ。少しだと面白くないよ。」

Bちゃんするって言ったよ。さっき」と早口で言い、口調や表情から、約束したのに、あんなにまっていたのに」という思いが感じられる。担任は以前のC子だったら泣いたり怒ったりするのだが……とはらはらしながら見守っていると、はつきり言葉で言っている。「だって少ないとつまんないよ」と繰り返すC子の言葉から担任はドッジボールを始めた気持ちを読み取り、すぐ近くで一人で鉄棒をしていた同じクラスのH男を誘うように言うとC子は「うん、そうだね」と気分転換をして「Hくん、ドッジボールしよう」と誘い、H男が「いいよ」と答えると嬉しそうに二人で友達が待つコートの方に向かっていった。担任はこの時C子が相手の思いや状況を考えようとする姿、言葉で表現し解決しようとする姿に接し、C子の成長を感じ嬉しく思った。

この時期、時には、思いにとらわれたり、強い言葉を使ったりすることもあったが、してほしいことを頼む時は相手の思いや状況を考えて言葉で表現する姿が見られるようになった。

以上がC子の二年間の変容である。

C子との生活でもいろいろな出来事があった。「えー、どうして…」と自分の力の限界を感じたことも度々であった。また一方で、私のクラスにならなかつたら、違う生活を送っていたであろう」とすまない気持ちになることも度々であった。

『詫びる心―育ての心―より倉橋惣三著

自分としては一ぱいに尽くしてきたつもりであるが、その自分の足りないために、欠けたこと、誤っていたところも少なくなかったであろう。

そのまた、いっばいに尽くしてきたつもりが、その実甚だたるみの多いものであったではなからうか。自分の足りなさが、その自分に分からないのは、どうす

ることも出来難いとしても、もっと尽くせば尽くせるものを尽くし尽くさなかったことが気にかかる。

よるこばれると済まなくなる。礼をいわれると気恥ずかしくなる。嬉しさと目出度さに上気させられるような、三月末の賑やかさとはなやかさとの後に、子どもにはしらせずにそつと独りで詫びたい心が残る。』

こんな思いでC子をおくりだしたのは一年前のことである。力不足の私は先生という立場を忘れて思いをぶつけてしまったこともある。行き届かない二年間だったと思う。でも私とC子たちとのかけがえのない二年間であり、私にとって『先生になって良かったと思う時』がぎっしりつまった二年間である。

アンケートにはこう書いた。

○ 朝、シーンと静まり返った園舎に子供たちの声が響きわたり、壁際に押し寄せられたり片付けられたりした物が、次々と子供たちの手によって使われていくのを見ながらどんな一日が始まるかとわくわくしている

そんな時です。

新しい年度が始まる。子供たちは「年長さん」と呼ばれるのが嬉しい。一階の保育室から二階の保育室になることが嬉しい。嬉しいことがいっぱいある。その嬉しさを一緒に喜び、一日一日を大切に過ごしていきたい。

(新宿区立落合第四幼稚園)